

TOKAI原子力サイエンスフォーラム  
(平成29年度東海村地域社会と原子力に関する社会科学研究支援事業)

# 原子力防災に市民は 主体的に関与できるのか？ —防災学から原子力防災を考える—

2018年2月18日

城下 英行

関西大学社会安全学部

---

# 問題意識

- 災害や事故といった専門家による未来予測が不十分な事象に、我々はどのように向き合うべきなのでしょうか
- 専門家であっても完璧に将来を見通すことができないという事実をふまえる時、当事者の視点が欠かせません
- 当事者が専門家による見通しも参考にしつつ、主体的に生を選択できることを担保することが重要
- 主体的な生の実現するための広義のコミュニケーションのあり方について、東海村のみなさんと考えたいと思います

## 具体的目標

- 原子力防災に関して議論を行うワークショップを3回実施することで、万が一の時に最善を尽くしたと誰もが納得（≡受け止めることが）できるような状況にするためには、「誰が」「何を」「どのように」議論しておくことが必要なのではないでしょうか？

## 防災学から原子力防災を考える 連続ワークショップ（全3回）

災害や事故と主体的に向き合うためには、事前に「何を」「どのように」考えておくことが重要なのではないでしょうか。科学でも完璧な未来予測はできません。万が一の時に最善を尽くしたと雖もが納得することができるような事前の備えについて、特にコミュニケーションの側面から3回にわたって考えたいと思います。多数のみなさまのご参加をお待ちしております。

なお、各回ワークショップの内容は相互に関連しておりますので、全3回のご参加を推奨いたします。（部分でのご参加もいただけます）

第1回のワークショップでは、新潟県中越地震の被災集落で長きにわたり実践的な研究に取り組まれている宮本匠さん（兵庫県立大学 講師）をお招きして、防災や復興の観点から話題提供をいただきます。

第2回のワークショップでは、東日本大震災以降、被災地の支援活動にも従事されている西崎伸子さん（福島大学 教授）をお招きして、そのなげめや思いについて話題提供をいただきます。

第3回のワークショップでは、第1回、第2回のワークショップをふまえ、防災や事故防止に専門家のみならず住民も関わることのメリット、デメリットについて、ご参加のみなさまと意見交換を行いたいと思います。

第1回 2018年1月20日（土） 13:30 ～ 15:30

第2回 2018年2月10日（土） 13:30 ～ 15:30

第3回 2018年2月17日（土） 13:30 ～ 16:00

会場：いばらき量子ビーム研究センター 1階会議室

定員：50名（定員を上回る場合は抽選。全3回参加できる方を優先いたします）

お申し込み方法：

事前に郵便はがき、メール、FAXにてお申し込みください。詳細は、裏面をご覧ください。

主催：「原子力防災に市民は主体的に関与できるのか？—防災学から原子力防災を考える—」研究会  
（代表：関西大学社会安全学部 城下英行）

本研究会は、平成29年度東海村地域社会と原子力に関する社会科学的研究支援事業の支援を受けています。

# 広報とうかいと新聞 折り込みチラシで告知

防災学から原子力防災を考える  
連続ワークショップ

期日▼1月20日（土）

時間▼午後1時30分～3時30分

場所▼いばらき量子ビーム研究センター

内容▼演題：「減災・復興の主体形成  
について」▼講師：宮本匠さん（兵

庫県立大学専任講師）

その他▼第2回を2月10日（土）、第3  
回を2月下旬に開催予定です。

申・岡氏名と連絡先（電話番号やメー

ルアドレス等）を記入の上、1月18日

（木）までに、郵送またはファックス、

メールで、関西大学社会安全学部城

下英行さん（〒569-1098

大阪府高槻市白梅7-1 FAX 072

-684-4007  hideyuki@

kansai-u.ac.jp）へ申し込みください。

# 第1回：自然災害の防災に学ぶ

- 講師：宮本匠さん（兵庫県立大学専任講師）
  - 演題：減災・復興の主体形成について
  - 参加者：11名
-

# 誰が、何を、どのように

- 宮本先生の事例では、「誰が」、「何を」、「どのように」やりとりしていたでしょうか
  - まずは、黄色の付箋に「何を」をやりとりしていたのかを書いてください
-

# 何を（グループ1）

- ベトナム生
- 村人が話し出しコミュニケーションがとれ出す
- 防災／減災
- 相手の存在を認める
- 嫁に行く決断の理由 結婚前のエピソード
- 中越地震後冬を越えて家が倒壊
- 現状肯定 肯定的な生活 自然（水、花・・・）を通しての生活の基本 村人に自然の豊かさを教えられる 草木の名前を知る 足下の豊かさ とともに山歩きをした
- 住民と学生間の生き方 大学生がボランティアで村に入り農業を始めた 畑づくりをてつたう
- 現状否定
- 道路を村人で復旧
- 茶のみでコミュニケーションをスタートした お茶のみ 地場産の料理を味わう
- 3.11→3.31問題
- 津波避難シミュレーション

# 何を（グループ2）

- 畑仕事 野菜作り
- きはだの大切さを 木の内皮の色 山野草（浦島草、ネジ花） 近  
くの山の木薬になる
- 今あるものに気づくことを
- 木沢村の復興
- お茶のみ会 村の生活（くらし）
- 母親の仕事（助産婦さん）
- 学生と山歩き 山あるきのおもしろさを
- 井戸水 井戸の水のおいしさを
- 水が出ない
- 住民がつぶれた道路を開通 道路をつくったりトンネルを掘ったり  
すること
- 結婚の条件？ 木沢ばあさんの結婚観
- 問題改善を誰がするか
- ボランティア（大学生）と村民とふれあい 村の人の話をきくこと  
を 大学生に教えることを

# 反省点

- 初回のWSであり、直接的な作業をお願いしてしまっただ
    - 「誰が」、「何を」、「どのように」やりとりしていたでしょうか
  - 記憶力テストのようになってしまい、また、十分な議論の時間を取ることができなかった
    - アンケートにも議論の時間不足を指摘する意見
-

# 一番印象に残った話 (アンケートより)

- 「めざす」かかわり「すごす」かかわり
- めざすとすごすのかかわり方。自主性のない場合は成功しない
- 「めざす」かかわりよりも「すごす」かかわりが住民の気持ちを肯定的にした
- 減災を左右するのは人間の精神論にあること
- 嫁にいく条件・・・井戸水
- 生き生きとする生きがいの重要性。自主と依存の精神を生むのはなぜか
- 防災と減災の違い。減災サイクル
- 災害後の復興は基本的な考え方
- 防災の主体をどこにおくべきか。押しつけになりがちな「めざす」方法がかえって弊害になるという話はもっともだと思います
- 減災、復興について

## 第2回：福島に学び、未来に備える

- 講師：西崎伸子さん（福島大学行政政策学類教授）
  - 演題：原子力災害を「想定内」にするために：3 1 1 原発事故からの教訓
  - 参加者：8名
-

# 一番に印象に残った話

- 統計から消える
  - 食物汚染の理解
  - リスクコミュニケーションで信頼を得る
  - いかに次の原発事故に備えるのか？（次の事故を想定が変）
  - 異なる見解（食べ物基準等）に対する合意形成
  - 良い政治家を選んでおく
  - リスクコミュニケーション。常に相手の立場に立って考える
  - 情報の集約、活用の重要性
-

# 一番印象に残った話を聞いて さらに議論を深めたいこと

- 世の中の事象に想定外はない。360°想定する事が大事
- 軽水炉原発はダメ？
- 安全性が担保されないまま食べてもいい、戻ってもいいとされる危険性
- 事故後の社会問題を国・関係者含め取組んで欲しい（甲状腺がん、廃棄物処理）
- 住民の意識を取り込める政治体制・システムの進化
- 住民主体づくり（体制）を忘れずに！
- その分野の専門家の意見をいかにして施策に反映・活用するか。一般の人に理解を得るか。その手法は？

# 第1回、第2回のワークショップを終えて

- 主要な論点
    - 自然災害と事故の違い
    - 防災と事故防止の違い
    - 原子力事故と原発事故の違い
    - 専門家、リスク、想定外、コミュニケーションなど、よく用いられる言葉の定義
    - そもそも事故が起こることを前提としていることへの疑問
-

# 第3回：自然災害と原子力災害は 同じなのか、違うのか？

- 第1回、第2回をうけての話題提供
    - 自然災害と事故の違い
    - 防災と事故防止の違い
    - 想定外について
  
  - 参加者：5名
-

# 議論の場を設計してください

- 万が一（原子力事故）の時に最善を尽くしたと誰もが受け止めることができるような状況にするためには、「誰が」「何を」「どのように」議論しておくことが必要なのではないでしょうか？

議論の場の名前:

誰が:

何を:

どのように議論:

# 議論の場の名前

- 想定外を考えるどのように
  - 原発事故想定した住民の話し合い
  - 宇宙を生活圏にする未来
-

# 誰が

- 世代がかたよらないように
- 住民・社会
- 住民同士が
- 女性のみ
- 小学生のみ
- 中学生のみ
- 現場の作業者も各学会（原子力、放射線以外も含む）も
- 社会を構成する多くの組織（専門家集団以外）
- ファシリテーターをはさんで30km圏内の住民が
- 原子力発電所のない地域の若者

# 何を

- 原発の是非
    - とその事故防止
  - 原子力の是非
    - とその事故防止
  - 原子力／原発の安全管理
  - 科学技術論
  - 東海村の将来像
-

# どのように

- けんかにならないように
  - 議論のルールを定めて紳士的に
  - 自由な意見の尊重 内部情報も含め
  - 各業務の内容に立ち入って市民が議論
  - 技術論、経済論にかたよらないように
  - ワールドカフェ
  - シーキューブのような組織に関与（参加）する
-

# 目指すべき議論の場とは？

- 住民が中心であるべき
    - 多様な住民が参加できるものであること
  - 原子力と原発は、まずは、切り分けて考えるべき
  - 東海村の将来像も検討すべき
  - **議論の場に関わってもらう方法の検討も重要**
-

# まとめ

- 防災は、災害を防ぐこと
    - 災害は、自然現象と社会との接点で生じる
    - どういう状況が災害なのかということは、当該の社会が意識的、無意識的に決めている
      - 人的、物的の損失だけが災害ではない
  - 「東海村にとっての災害」とは何かを「住民が中心」となって考えることが求められている
    - 結論への同意ではなく、過程への参加
-

**どうもありがとうございました**

---

# 東海村の自慢

## (第1回ワークショップより)

- 人口が増え続けている
- 干イモ
- 水がおいしい。干芋はおいしい。
- それなりの教養を持つ人間がいること
- **原子カ**ムラの大きな圧力の中、原発に疑問をもつ声、反対の声が少しずつ上がってきていること
- 考えたことなし。**原子力**の村という割にくらしに密着していない
- 先端技術を受け入れている
- 全体的に良い社会（環境、教育、福祉）
- ほどよいサイズの住みやすさ
- **原子力**発電日本初！